

先端社会研究所 個人業績・活動報告 (2011年1月～2011年12月)

所長 島村恭則

「共生／移動」研究の一環として、引揚者、在日朝鮮人、沖縄出身者、台湾原住民、倭寇等について、現地調査と文献調査を実施した。とりわけ、それらの対象に見られる〈生きる方法〉の可塑性や相互関連性に着目することで、既存の「多文化共生論」ではとらえにくい多文化状況の流動性、アイデンティティの可変性等について解明することをめざした。その成果の一部は、以下に発表した。

◆書籍 (分担執筆)

「引揚者—誰が戦後をつくったのか？」『現代文化のフィールドワーク 入門』(山泰幸・足立重和編)、ミネルヴァ書房、2012年1月、pp.179-199.

◆研究ノート

「宮古島に会いなおす—1989 狩俣から 2008 熊本へ—」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第6号、2011年10月、pp.57-64.

◆国内シンポジウム発表

『学園前』と『学研都市』—丘陵開発をめぐる〈民〉と〈官〉— 関西学院大学先端社会研究所シンポジウム「関西私鉄文化を考える」 関西学院大学、2011年10月1日。

◆国内研究会発表

『トンネ』の発見—総聯系エスニックメディアにおける『場所』の物語— 国立民族学博物館共同研究「朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究」(研究代表者 朝倉敏夫教授)、2011年度第1回研究会、国立民族学博物館、2011年10月22日。

「天神商店街と伊賀飛行場—神社境内地に形成された闇市系商店街をめぐる—」 地域言語研究会平成23年度第1回研究報告会、大阪大学文学部、2012年1月8日。

副所長 金明秀

2011年の研究活動は、以下の4つの課題を中心に行った。(1) 日本人のナショナル・アイデンティティと排外主義的態度に関する研究。(2) 在日コリアン青年の生活とエスニック・アイデンティティに関する研究。(3) 東日本大震災に関する研究。とりわけ、石巻市の外国籍住民に関する研究。(4) 雲南省少数民族の生活に関する研究。

(1) についてはサーベイデータを用いた計量的なアプローチと、インターネットの排外主義に関する歴史社会的なアプローチを用いた。(2) は全国規模で確率抽出サンプルを対象に郵送調査法を実施するべく、調査票の作成を進めた。(3) は8月に被災地を視察し、問題の所在を特定した。また、石巻市で外国籍住民を対象として実施されたサーベイの調査票を整理するとともに、同じ母集団を対象に新たに実施する調査票の検討を進めた。(4) は8月にフィール

ドワークを実施し、問題の所在を特定した。

これらに関連した業績としては、(1)に関する論文、学会発表、国内研究会発表、および(2)に関する国際シンポジウム発表がある。

◆論文

「インターネット利用史にみられる2つの《グレシャムの法則》——ハン・ワールドの体験を中心として」『日本學』第33輯、2011年、pp.169-197.

◆国内学会発表

「日本国民のナショナル・アイデンティティと排外主義に関する計量社会学的な検討」第84回日本社会学会大会（関西大学）、2011年9月18日.

◆国内研究会発表

「インターネット利用史にみられる2つの《グレシャムの法則》」ネットと市民運動研究会 第1回公開研究会（東京ウィメンズプラザ）、2011年7月1日.

◆国際シンポジウム発表

「右傾化する日本社会と在日韓国人青年のアイデンティティ形成」東国大学校文化学院日本学研究所第43回国際学術シンポジウム（韓国ソウル）、2011年2月26日.

専任研究員 岩佐将志

本年度はまず、2009年度先端研共同研究「戦争が生み出す社会」の継続と発展を意識しつつ、前年度までの研究成果の公表に努めた。その成果は、難波功士編『戦後空間と米軍基地』（2012年刊行予定）に所収される予定である。

また、前年度にオランダ戦争資料研究所と共同で開催した国際ワークショップでの発表に基づき、日本人「戦争花嫁」が戦後日本メディアにおいて如何に表象されてきたかについて考察を進めた。この成果も、以下の通り2012年に刊行予定である。

更に、前年度より先端研共同研究「セキュリティ／排除」（リーダー：難波功士社会学部教授）にも着手している。これまでは、近年の文化研究、メディア・コミュニケーション研究の動向に基づいて、現代における「セキュリティ」と「排除」との間の錯綜した関係についての理論的な探求を続けてきた。この成果は来年度の公表を予定している。

また、本研究所の業務としては、定期研究会や各種シンポジウム・イベントの企画・運営、『先端社会研究所紀要』の編集、ポスト大学院GP運営事業の下での各種大学院生教育事業、メールマガジンを通じた研究所の広報活動等に従事した。

◆書籍（分担執筆）

「米軍駐留がフィリピンにもたらしたジャズ—ミュージシャンの親米感覚を中心として—」難波功士編『戦後空間と米軍基地』2012年（予定）、新曜社.

「コラム：厚木にはない厚木基地」難波功士編『戦後空間と米軍基地』2012年（予定）、新曜社.

“The Othering of Japanese ‘War Bride’ in Media Representation in Postwar Japan,” in Eveline Buchheim and Ralf Futselaar (eds.) *Race at War in the Twentieth Century*, 2012 (forthcoming), Amsterdam:

Amsterdam University Press.

◆書評

「Alexa Robertson, *Mediated Cosmopolitanism: The World of Television News*」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第5号、pp.65-71.

専任研究員 辻 輝之

前年度より引き続き本研究所が実施する共同研究のうち、「共生／移動」（主査：島村恭則 社会学部教授）に研究員として参加するとともに、定期研究会の実施、紀要の編集など、研究所の専任研究員としての業務に従事した。

個人の研究活動としては、2011年4月より日本学術振興会の科学研究費補助金を受けて、「宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として」を実施している。4～12月までは、質的データ解析プログラム N-vivo を導入しながら、前年度までに実施した調査で入手したデータの整理と分析を実施してきた。主な、個人研究業績は以下の通り。

◆書籍（分担執筆）

“Trinidadian and Tobagonian Americans.” In *Multicultural America: An Encyclopedia of the Newest Americans*, edited by Ronald H. Bayor, 2135–2189. Westport, CT: ABC-CLIO/Greenwood Press.

“Problematising Creole: Reflections of Black Power in the Caribbean Scholarship.” In *Reflections, Relevance, and Continuity: Caribbean and Global Perspectives of Black Power* (Provisionally titled), edited by Jerome Teelucksingh. Mona, Jamaica: University of the West Indies Press（編集中、2012年出版予定）.

“Cocoa, Catholicism, and Creoleness: The Ethnicized Plantation Economy as a Matrix for Modern Trinidad.” In *Plantation Modernity* (provisionally titled), edited by Army Clukey and Jeremy Wells. Athens, GA: University of Georgia Press (New Southern Studies Series)（編集中、2012年出版予定）
「戦後引揚げというく方法」——帰還移民研究への視座」島村恭則編『戦後引揚げの民俗誌』新曜社（編集中、2012年出版予定）

◆研究ノート

「く改宗の政治——南アジア系ディアスポラとペンテコステ派キリスト教」関西学院大学先端社会研究所紀要、第5号、pp. 37–45

◆書評

Jocelyne Guilbault, *Governing Sound: The Cultural Politics of Trinidad's Carnival Music*. Chicago: The University of Chicago Press, 2007. *Wadabagei: A Journal of the Caribbean and Its Diasporas*. 13 (2): 91–94.

Glenda Tibe Bonifacio and Vivienne SM. Angeles, *Gender, Religion, and Migration: Pathways of Integration*. Lanham, MD: Lexington Books, 2010. *Religion and Gender*（2012年出版予定）.

◆国際学会発表

“Villaging the Nation: Eric Williams and Engineering of National Culture.” The International Conference, *Independence and After: Eric Williams and the Making of Trinidad and Tobago*. University

of London, Center for the Study of the Americas. September 27, 2011.

専任研究員 Ralf Futselaar

During 2011, I have begun working on two new lines of enquiry. The first of these is the history of racism. I have worked to edit an English-language book on Racism, to be published in 2012, as part of the IASR-NIOD collaboration. Another project in this line, that will also lead to a book published in 2012, is the recruitment and deployment of African troops by Colonial powers.

Another line of enquiry is the changing posture of the Japanese and the use of biological data in Social research. A first presentation of my new insights took place at UC Berkeley in February.

More information about my work is available at www.futselaar.org.

◆論文（査読学術雑誌）

“Viva Olanda. Een Hollander in Japan” In *Holland. Historisch tijdschrift*, 43, no.3 (2011), pp.258-259.

◆書籍（分担執筆）

“A Noisy Silence. Why are there So Few Dutch Movies about World War II in the Pacific and the War of Independence in Indonesia?” in *Restaging War and Peace. A Comparison of Japanese and Chinese War Movies*. Kyoto: Institute for Research in the Humanities, 2011.

◆国内研究会発表

“The Health-Wealth Tautology? Modern Japanese History and the Relationship between Economic Development and Public Health” (Osaka University, Osaka, Japan: 4 June 2011).

“Why are There so Few Dutch Movies about World War II in Indonesia?” (*Restaging War and Peace: A Comparison of Japanese and Chinese War Movies*, Kyoto University, July 2011).

◆国際シンポジウム発表

“Closing the Gap: Epigenetic Heredity and the Slow Catching Up Of Japanese Heights in the 20th Century.” (Asia Pacific Economic History Conference, Berkeley, February 2011)

リサーチアシスタント 雪村まゆみ

本年は、フランスにおけるアニメーションと戦争の関連について考察した論文「ヴィシー政権下におけるアニメーションの制度化」の執筆を行った。また、アニメと空間の表象について考察し、日仏社会学会 2011 年度大会において、「他者表象とアニメーション—アンリ・ルフェーブルの空間論から」の報告を行った。2011 年 11 月 3 日—4 日の日程で、パリの社会科学高等研究院で開催された日仏コローク（第 12 回学術シンポジウム社会学部門）にて、Les animations comme pratique culturelle 報告を行った。

景観・空間プロジェクトにおいては、定期研究会の開催補助を行った。また、2011 年 7 月 3 日から 10 日の日程で、リヨン、グルノーブル、アヌシー（フランス・ローヌ・アルプ地方）における都市開発と景観保存についての調査を行った。この調査の成果は、「都市空間における中心の創出」（仮）として報告予定である。

◆論文

「ヴィシー政権下におけるアニメーションの制度化」『日仏社会学会年報』第20号、日仏社会学会、p.65-p.84（複数レフェリーによる査読あり）。

(with Masahiro Ogino) “Applying animated film to Social Research: A Dipiction of Bullycide,” in *Sociology, Aesthetics and the City*, Pisa University Press: p.241-p.262.

◆国内学会発表

「他者表象とアニメーション—アンリ・ルフェーブルの空間論から」、2011年度日仏社会学会大会、日仏会館（2011年10月）。

◆国際学会発表

Les animations comme pratique culturelle, COLLOQUE FRANCO-JAPONAIS, EHESS(2011.11).